［活動報告］

「学術雑誌の動向に関するセミナー 2019：学術雑誌は誰のもの？ 研究力強化とオープンアクセスのリテラシー」実施報告

菅原　真紀

1. はじめに

附属図書館と研究推進部研究推進課の共催により，「学術雑誌の動向に関するセミナー 2019：学術雑誌は誰のもの？ 研究力強化とオープンアクセスのリテラシー」を学内 6 か所で開催した。

オープンサイエンスを支えるオープンアクセスが進むことで，研究者にはどのような影響があるのか。近年急速に広がる学術雑誌のオープンアクセスの現状について，海外の事例や国内の取組みを紹介し，学内の教員に理解していただくこと，今後の在り方について議論を深めることを目的とし，大隅典子附属図書館長よる講演を中心として構成した。その実施内容について報告する。

2. 実施概要

2.1. 日程・場所

セミナーは以下の日程で全 6 回行った。

第 1 回 片平キャンパス
　　：4/16（火）16:30-18:00 知の館
第 2 回 星陵キャンパス
　　：5/24（金）18:00-19:30 星陵会館
第 3 回 青葉山東キャンパス
　　：6/28（金）15:30-17:00 工学研究科中央棟
第 4 回 青葉山北キャンパス
　　：7/22（月）16:30-18:00 理学研究科合同 C 棟
第 5 回 青葉山新キャンパス
　　：8/30（金）16:30-18:00 青葉山コモンズ
第 6 回 川内キャンパス
　　：9/27（金）16:30-18:00 川内北講義棟

このほか，7 月 2 日に行われた商議会においてもダイジェスト版での講演を行った。なお，第 1 回の片平キャンパスは研究推進・支援機構知の創出センター，第 4 回の青葉山北会場では理学部・理学研究科，第 6 回の川内会場では文学研究科とそれぞれ共催とした。

2.2. 講師

セミナーの講師は，趣旨説明を早坂忠裕理事・副学長 (研究担当) に，講演を大隅典子附属図書館長，副学長 (広報・共同参画担当) が担当した。第 5 回の青葉山新キャンパスでの回は，河村純一研究推進・支援機構 URA センター長が趣旨説明を行った。

2.3. 参加者

教員，大学院生，学部学生，研究推進課職員，附属図書館職員等の参加があった。総参加者は 154 名となった [1]。

第 1 回 片平キャンパス：44 名
第 2 回 星陵キャンパス：15 名
第 3 回 青葉山東キャンパス：31 名
第 4 回 青葉山北キャンパス：20 名
第 5 回 青葉山新キャンパス：23 名
第 6 回 川内キャンパス：21 名

2.4.ISTU での公開

第 3 回の青葉山東キャンパスでの講演からは，全学の教育 FD として申請し, ISTU 支援室のご協力により，講演を録画・録音し，ISTU（東北大学インターネットスクール）上での公開を行った。対象は学内の教職員で，7 月からの公開で閲覧回数は 140 回以上となった (2019 年 12 月時点)。

3. 実施内容

3.1. 実施に至る経緯

セミナーの実施には学術雑誌のオープンアクセス化を目指すイニシアチブ “OA2020”[2] をはじめとする，世界中で広まりつつあるオープンアクセス化の動きが背景にある。東北大学附属図書館でも，2019 年 1 月に海

1　附属図書館ウェブサイト等に既出の実施報告では，参加者 149 名と報告したが，最終的な確認を経て 154 名を確定数とした。

2　OA2020. https://oa2020.org/,（参照 2019-12-18）.

外の出版社からいわゆる Read & Publish モデルの契約提案があった。Read & Publish モデルとは，これまで別々に支払っていた雑誌の購読料（Read）とオープンアクセス論文の投稿料（Publish）を一本化して支払うモデルである。現在は雑誌を購読するための契約のみを図書館で扱っており，論文の投稿料は各教員が研究費から支払っている。雑誌購読のための学内の経費負担方法も従来の冊子購読を踏襲しており，Read & Publish のうち購読（Read）部分しか対応できない。そのため，この提案は見送りとなったが，今後も同様の提案が出てくることは間違いない。館内の話し合いにより，学内の教員に現状を理解してもらい，今後の対応策を検討する必要があるとの結論に至り，研究推進部の共催により，全キャンパスをめぐるセミナーを行うことが決定した。

3.2. 講演内容

セミナーは，まず早坂理事から趣旨説明として，今回のセミナーの概要をご説明いただいた。オープンアクセスについてだけではなく，ハゲタカジャーナルや研究の公正性についても言及があった。

続いて大隅館長による講演では，オープンサイエンスの話題にはじまり，学術雑誌の高騰問題，国内大学の資料費推移，国内外のオープンアクセスに係る動き，インパクト・ファクターやハゲタカジャーナル問題など広い範囲に触れた内容となった。毎回講演の内容は前の回での質疑応答の内容に対応した情報の追加やその時々の新しいトピックを加え，内容をアップデートした。初回のプレゼンテーション資料は 20 枚程度であったが，最終回では 40 枚以上となった。

図 1　趣旨説明を行う早坂理事

図 2　講演を行う大隅附属図書館長

図 3　第 1 回片平キャンパスでの様子

3.3. 質疑応答

質疑応答では，毎回多くの質問や意見が寄せられた。主な内容を以下に示した。

- オープンデータの現在の動きがあれば聞きたい。またデータ公開の課題は何か。
- 購読料に替わって APC が高騰していく可能性があり，オープンアクセスモデルも根本的な解決にはならないと思うが，どうか。
- 商業的な大手出版社に対抗したジャーナルを作るなど，科学者コミュニティで対応する仕組みが必要なのではないか。
- APC の価格について，集団的に交渉する動きはないのか。
- なぜここまでインパクト・ファクターが重要なのか。人事評価などに用いられる仕組みを変えなければならないのではないか。
- 学会誌の編集を担当しているが，オープンアクセスは進まず，IF が伸びない。一方で成果物をオープンにすると，営利目的で二次利用されることもある。オー

プンアクセス化のメリットと二次利用についてはどうなっていくのか。
・論文を投稿すると査読時に成果が盗まれるということもある。モラルの問題についてはどうか。
・論文の質より数が重視される状況に反対するような動きはないのか。学術会議などではどう考えられているのか。
・国内他大学でパッケージ契約を中止した後は，個別タイトルで契約したのか。
・機関リポジトリに論文を登録しているが，ダウンロード数などのフィードバックがほしい。
・プレプリントサーバへ投稿した論文の業績評価はどうなるのか。途中までのデータを公開して，他の人に不正利用されてしまうことはないのか。
・論文の発信方法として研究者向け SNS を利用しているが，セルフアーカイブが可能で便利である。
・研究者が査読や投稿をボイコットする，というようなアクションは，日本あるいは東北大として可能なのか。
・出版社のデータベースを利用して大学の評価で使用するデータを得ており，インフラを握られている状態と言える。出版社には適わないのではないか。
・具体的に，大学としてどこを目指しているのか。
・工学系ではインパクトファクターを重要視していない。Total citations や h-index など論文の被引用数を利用している。新たな評価指標が編み出せるとよいと考えている。
・オープンアクセスにしたいと思うが，価格が高い（平均 20 ～ 30 万円）。また，雑誌の契約により読むことができるため，オープンアクセスにしていない。
・企業では研究費ではなく広告費として投稿料を支出している。東北大学でも大学として予算をとることを考えてもよいのではないか。
・大学の図書館資料費の平均が下がっていて驚いた。
・機関リポジトリをそれぞれの機関で維持する必要があるのか。また，機関リポジトリのシステムは使いづらい。研究者向け SNS にはアップロードに便利な機能がある。
・今後は明確なステートメントを出してもらいたい。教員としても，大学の方針にできるだけ歩調を合わせたい。
・オープンアクセスにすべきか，という問題は，書く側・読む側の立場によって異なる。個々の研究者に考えさせる問題ではない。
・大手学会でも雑誌の契約額は上がってきているのか。
・ノルウェーやポーランドなどで成立した Read & Publish 契約の場合，契約額を支払うのは国か，日本の文科省にあたる部署か，それとも大学か。
・予算がないと APC が払えず OA にできない，ということになると大学格差につながるのではないか。
・論文の出版や購読について，最低限の環境を確保し，日本全体に還元するような仕組みがあれば良いと考える。
・プレプリントサーバの利用によって OA を推進するという話があったが，購読料や APC の支出を減らすことにはつながらない。大手出版社ではなく，購読料や APC を安く設定する雑誌への投稿を奨励するしかないのではないか。東北大で雑誌を運営している研究者に雑誌の OA 化を推奨し，それを支援すれば OA 化が進むのではないか。
・所属学会で OA 誌を創刊した際，大手出版社に依頼した。当初は科研費の助成があったため APC を無料にしていたが，有料にしてから投稿数が減少している。発刊のときから総編集長をやっているが，雑誌の運営はかなりのエネルギーを要する。
・高額な APC が研究費を圧迫するため，研究室にとっては Read & Publish モデルが良い。
・海外で行っている国ごとの交渉の窓口はどこか。また，なぜ日本ではそのような交渉ができないのか。
・国立大学も高専のように全国で一本化した契約をすることはできないのか。
・APC の内訳はどのようになっているのか。
・海外で Read & Publish モデルへの移行が進んでいるということは，現在の購読契約よりもメリットがあるということか。
・経済分野では，雑誌に掲載される前の論文をディスカッションペーパーとして研究者同士で公開する習慣があるが，プレプリントサーバに載せるほうが良いのか。

毎回参加者からは活発な意見があり，特に現状の研究の評価方法に関する意見やオープンアクセスに関した質問が多く寄せられた。また，雑誌を運営する側としての教員からの意見もあり，興味深かった。

その他にも，ある研究科では大学院生に対して投稿料の補助を行っているという情報など，図書館では把握できていない情報が得られたほか，図書館で運営す

る機関リポジトリに関する意見や投稿方法についての質問，電子ジャーナルの利用に関する質問などが寄せられるなど，利用者からの意見を直接得られる貴重な機会となった。

3.4. アンケート

講演内容についての意見収集のため，アンケートを行った。Google フォームを利用したウェブフォームを案内したほか，第 2 回からは回収率を上げるため紙でも配布した。アンケートの設問と回答は以下に示した。

［1］参加会場

		回答数
4/16（火）	片平キャンパス	4
5/24（金）	星陵キャンパス	7
6/28（金）	青葉山東キャンパス	15
7/2（火）	商議会	5
7/22（月）	青葉山北キャンパス	10
8/30（金）	青葉山新キャンパス	10
9/27（金）	川内キャンパス	11
総計		62

［2］身分

	回答数
教授	27
准教授	7
講師	1
助教	7
助手	1
その他の教員	2
大学院生	4
学部生	2
職員	9
その他	2
総計	62

［3］所属

	回答数
医学系研究科	6
病院	1
理学研究科	5
理学部	1
薬学研究科	2
工学研究科	8
医工学研究科	3
環境科学研究科	1
情報科学研究科	3
農学研究科	7
農学部	1
文学研究科	1
経済学研究科	1
法学研究科	2
教育学研究科	1
金属材料研究所	1
流体科学研究所	1
電気通信研究所	1
多元物質科学研究所	1
生命科学研究科	3
産学連携機構	2
史料館	1
研究推進部	2
URA センター	1
図書館	3
無回答	3
総計	62

［4］論文を投稿する際，オープンアクセスにしていますか？

	回答数
できる限りオープンアクセスにしている	23
オープンアクセスにしていない	23
論文を投稿したことがない	10
無回答	6
総計	62

［5］オープンアクセスで公開する際の，APC（論文投稿料）は年間どれくらい支払っていますか？

	回答数
0 円	9
10 万円未満	3
10 万以上 -20 万円未満	5
20 万以上 -30 万円未満	1
30 万以上 -40 万円未満	6
40 万以上 -50 万円未満	3
50 万以上 -60 万円未満	2
60 万円以上	1
不明	2
無回答	30
総計	62

［6］Read & Publish 型の契約（購読料と APC を合算し一本化する契約）について，どのように思いますか？

この設問は第 4 回から追加し，20 名から回答が得られた。

・賛成
・是非進めていただきたいと思います。
・試みる価値はあると思う。
・様々な契約のケースがあるので一概には言えない。
・追加料金の価格とどの程度 OA 化されるかによる
・負担金額，負担者がだれかによる。大学で負担する場合は可。部局・研究者（室）の負担増なら現状で。
・APC が研究者負担にならないとありがたいです。
・支出が少なくなる方向にするべきと思います。
・研究者にとってはメリットがあると思うが，全体的には価格の高騰を抑えることにならないのでは。
・本当に総額が下げられるのか疑問はあるが，この方向に進むのは間違いないと思います。
・判断が難しい。
・交付金として APC を研究者個人へ支給し，論文を書かない人から没収したらよい。
・投稿するインセンティブになるが，投稿に上限がある場合はよくないと思う。
・効率はよいと思います。ただし，文理融合の学部・研究科は講座間での負担割合が問題。
・全体としてのコスト減や状況の把握しやすさにつながるのであれば良いものだと思います。
・けしからん

［7］東北大学の機関リポジトリ TOUR を知っていましたか？

	回答数
知っていた	46
知らなかった	14
無回答	2
総計	62

［8］今回のセミナーの感想や，内容に関する意見

・OA 化の推進による世界の動向，また日本の研究者が今置かれている危機的な状況が理解できました。
・ぼやっと感じていた危惧が明確となり，改善に向けた具体的な方法論を考える必要性を実感しました！
・問題は複合的であり，理想論では片付かないと思いました。IF 偏重は，職や研究費がかかっているということもありますが，研究者にとって評価されることは基本的なモチベーションであり，本能的なものでもあると思います。
・このようなセミナーを受ける機会がなかったため，大変勉強になりました。
・オープンアクセス化について意義・方向性等を理解できました。Read and Publish 契約はいいアイデアだと感じました。
・多くのハゲタカジャーナルがあるということなので，どのような雑誌がそれに当たるのか知りたいと思いました。
・基盤 C をいただいておりますが，APC が 20 万円以上になり，オープンアクセスにできませんでした。
・APC が高くてオープンアクセスは考えたことがありません。また，東北大学のリポジトリへの登録もなかなかメリットが感じられません。
・サーキュレーションのよいジャーナルに投稿し，reject されたら OA もひとつの選択肢にしている。
・大変参考になる。地方大学では状況が厳しい。
・図書館費用の部局，専攻での負担が大きいので，小さくなるように何とかして欲しい。
・大きく出版事情が変化していることが良くわかりました。
・オープンアクセス化への流れはリポジトリで全て解決できるのではないか？と思いました。リポジトリが浸透しない理由が，全著者から許諾をもらうのが面倒だからということでしたが，オープンアクセス料が高額すぎて支払うことができない場合は面倒でもリポジトリでオープンアクセスにすることとすれば良いと思います。一方で，研究費がたくさんある人は，オープンアクセス料を支払って，煩雑な手間を省けば良いと思います。
・オープンアクセスがなぜ必要なのか？について疑問に思いました。誰も，税金をオープンアクセスにするために使うことではなく研究そのものに使うことを望んでいると思います。
・ほとんどすべての論文を arXiv においている。
・OA にするかは APC の価格による。
・最近の学術雑誌を巡る状況がよく分かり勉強になりました。話も分かりやすくとても聞きやすかったと思います。
・OA にするかは投稿誌・内容による。OA にするのは投稿の 3 分の 1 程度。
・お話の内容は全て知っている内容でした。もう少し国

の動向などの情報が聞けると思っていたのですが。少し残念でした。

・勉強になりましたが，アクションについてはもう少し踏み込んだ方が，実感がわいてよいと思いました。
・出版社には搾取されすぎていると思います。もっと戦いましょう。
・大変勉強になりました。貴重な税金が浪費されているので，国の行政の怠慢につきると思います。国民をまきこんだ議論をすべき。
・海外の動向なども詳しく解説して頂きありがとうございました。
・東北大学の現状のもう少し具体的な統計・資料・分析が欲しい。図書館の課題と研究者の課題を区別し，それぞれ今何をすべきなのかがわかりやすく示されているとよかったのではないかと思われた。
・価値観・態勢・労力や経費負担のあり方は分野による違いが大きく，それをどのように考慮するのか，特に文系研究者としては展望をうかがいたいところであった。
・システムの設計が評価に結びつき，評価基準を単純化するのも問題である。
・国内，海外の情報が分かり勉強になりました。
・業績としての論文が今後どうなるのか不安。
・納税者である国民含め「誰でも」みられるように，というオープンアクセスの理念を忘れないようにしようと思いました。

4. おわりに

質疑応答やアンケートの結果を見ると，多くの方からの理解が得られ，学内の教員に現状を理解していただき，今後のあり方について議論を深めたいという当初の目的は達成できたように思われる。しかし，オープンアクセスモデルにより本当に支出が抑えられるのかといった疑問や，経費負担にかかる部局の負担感，図書館における調査不足が指摘されるなど，課題も多く残った。

セミナー開催のきっかけは 2019 年向けの提案からであったが，2020 年向け提案でも複数の出版社からオープンアクセスモデルへの提案があった。OA2020 の目標年である 2020 年を迎え，今後はさらなる検討と対応が求められる。今回のセミナーで得られた意見を参考に，学術情報の十分な整備のため，検討を続けていきたい。

なお，大隅館長・佐藤情報管理課長からの報告が「大学マネジメント」2019 年 11 月号「特集：学術情報流通基盤の変革を目指して」に掲載されているため，そちらもご覧頂きたい [3]。

また，第 3 回青葉山東キャンパスの回では東北大学新聞からの取材を受けた [4]。大隅館長へのインタビューも Web 版で閲覧できる [5]。

（すがわら　まき，附属図書館
情報管理課雑誌情報係）

3　大隅典子，佐藤初美 . “ 東北大学附属図書館のオープンアクセスを巡る状況 ”. 大学マネジメント . 2019, Vol. 15, No. 8, p. 31-37.
4　“ 学術雑誌の動向に関するセミナー 2019　～オープンアクセスの現状・課題～ ”. 東北大学新聞 . https://ton-press.blogspot.com/2019/08/gakujutsuzasshi.html,（参照 2019-12-18）.
5　“ ネット限定【学術雑誌セミナー】大隅典子・附属図書館長に聞く　～論文投稿にあたって～ ”. 東北大学新聞 . https://ton-press.blogspot.com/2019/08/ohsumi.html,（参照 2019-12-18）.